

船守 弥三郎

「弥三郎はおるか………」

声とともに、庄屋を先頭にたてて、四、五人の村の衆が家の土間にはいりこんできた。

夕げの支度をしていた女房は、はっとした顔をしたが、それもつかの間で、落着いたようすで、静かに答えた。

「はい、今しがた漁から帰りましたばかりで、背戸の方で身体をふいておりますが、何ぞ御用でございますか………」

「女房どの、落着いている時ではないぞ、早く、弥三郎をここに呼ぶがよい」
庄屋についてきた村の衆から声がかかった。

「はいはい、さつそく呼んで参りますから、ここにお掛けなさいまし、もうし弥三郎どん………」

女房が奥へ声をかけて、炉端から立ち上ろうとした時、ぬれ手拭を片手にもった弥三郎が、
「なんじゃい………」

と言いながら、部屋にはいりこんできた。

「これはこれは、庄屋様はじめ皆さまにはお揃いでございますか。この弥三郎に何か御用でもございますか」

「弥三郎、これだけの顔ぶれを揃えてきたからには、御用の趣きわかつておるであろうな？」

「ええっ」

弥三郎は、思わず女房と顔を見合せて返事をするのであつた。

「庄屋さまのお言葉、いっこう夫婦どもにわかりかねますが、どんなことでもございましょう」

弥三郎の女房が口をはさんだ。

「夫婦二人してとぼけるつもりか、これは驚いた。庄屋さま、早くいつてやった方が、嘘をつかせないですみますよ」

「弥三郎にはこの庄屋が、女房から申し伝えるようにいいおいた筈だ。たしか先月の今日、五月十二日の夜であつた。鎌倉よりの流人、日蓮なる僧侶をかくまつてはならぬと、しかと申し渡しておいたが、女房、よもや忘れましたと申すまいなあ。返答はどうじゃ。」

「はっ、はい」

女房の答には力がなかつた。

「弥三郎は、女房よりその村中一統へのおふれをきかなかつたとでも抗弁いたすつもりか、返答

はどうじゃ」

「弥三公やいっ」

庄屋のお伴が声をかけた。

「弥三公っ。かくしても駄目なんだ。お前が、坊さんを下の岩穴にかくまっておるのは、もう村中の評判になつてゐるぞ。もう少しおとなしくかくまつてればよいものを、日蓮坊と一緒にゐて夫婦で、南無妙法蓮華経と唱えておつたんじや、知れ渡るのがあたりまえだ……」

「どうじゃ弥三郎、返答をしろ」

庄屋と一緒にゐて叫んだ。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」

弥三郎が一同の腹わたにしみこむような声で唱題すると、女房も続いて唱え始めたのである。

「南無妙法蓮華経」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

庄屋を始め五、六人一同は、ただ茫然として土間につつ立ったまま、弥三郎夫婦をしばらくの間眺めているだけであつた。

「弥三郎が南無妙法蓮華経と唱えるのを、庄屋は自分の耳できいたぞ」

庄屋は大きな声で叫びながら言い続けた。

「弥三郎、この川奈の村には、南無阿弥陀仏の声はしても、南無妙法蓮華経など唱える奴は一人もおらぬのだ。南無妙法蓮華経と唱える以上は、この川奈の村を、たった今から出ていってもらわねばならないぞ」

「そうだそうだ弥三公、手前も念仏の悪口をいう坊主とぐるになつた以上は、とつとこの村を出ていってもらうぞ。坊主の方は念仏講の連中が、今宵のうちに海坊主にでも食わせてやるわ。大方の手筈を庄屋様がじきじきにきめて、実はてめいの処へやってきたのだ。さあさあご慈悲だ。荷物の少しももつてとつとでかけろい」

弥三郎はさすがに顔面を蒼白にさせたが、言葉だけは落着いていた。

「いかにも、この弥三郎夫婦は、地獄ゆきの念仏の珠数をきつて、法華の衆になつた。鎌倉からこられた尊いお聖人を、何の因縁かまな板岩にお助け申して、お聖人よりじきじきに船守りの姓をもらつて、今は船守弥三郎と名も改めて信心修行だ。上原の姓をすてた以上は念仏を唱えるこの村には、一人の親類縁者もないのだ。この川奈の村には何の未練もないわ。女房てめえは女だ。まさか、念仏の奴等がいくら意地悪でも、女には手だしはしまし。そこいらの荷物をまとめとそれこそ、とつとと背戸から逃げだせ。だが、この弥三郎はそうはいかぬえ。南無妙法蓮華経と唱える以上は、自我偈の文句じゃねえが、不自惜身命だ」

土間に飛び下りた弥三郎は、壁にかけた櫓をつかむと、仁王立ちになっていった。

「今ききや、お聖人さまに、念仏講の奴等が何か、悪さをたくらむ様子。女房、てめえは逃げる、俺は庄屋のどてかぼちやなぞに構っておれねえ。なにがなんでも、下の岩屋までは、死んでも駆けつけなきや、もつたいねえ。邪魔だてすりや、命はもうぞ」

弥三郎の勢いにのまれた人びとは、

「わあっ…」

と言いながら皆、家の外へとびちつてしまった。

「女房つ、忘れるな、南無妙法蓮華経だぞ」

弥三郎は女房に励ましの声をかけた。

「お役人だ」

「お役人さまがみえたぞ」

「伊東からお役人さまがみえたぞ」

「それつ、弥三郎をとりがすな」

家の外で大勢がどなりたてた。

「お前さん、お役人がみえたと外で騒いでいるよ。どうすりゃいいんだい私達は……」

「てめえも気の小さい女だ。何がこようと、南無妙法蓮華経のほかにあるものか。てめえは早く

背戸から逃げて、役人につかまるな。俺は日蓮さまに捧げた命だ。役人がおそろしくて、南無妙法蓮華経が唱えられるかい。すくねえにしまったが、まあ、あきらめろ」

「いやだよ。わたしや、こんな別れ方は……」

「馬鹿野郎、寂光土じゃ一緒だと、日蓮さまがいつてるわ……」

「……………」

「早く、背戸から逃げろ。俺は腕のつづく限りあばれて、少しは、川奈の弥三郎の法華魂をみせてやるのだ」

弥三郎は、女房に言い放つと、獅子奮迅の勢いで櫓をかいこんで、家の外にとびだした。

六月十二日の月が竹藪の上にかかつて、庭はぼうとうすぐらかった。

「それっ、弥三郎を逃がすな」

「それっ、弥三郎の奴。御覧の通り乱気いたしております。早く召し捕っていただきますでございます」

伊東から出向いた役人が四、五人、藪の月影の中にいた。

役人は、弥三郎の姿をみると声をかけた。

「弥三郎とか、気を静めい。思い違いをするではないぞ。召し捕りにまいったのではないぞ」

「ええっ」

弥三郎より、庄屋と村の衆が驚きの声を放った。

「弥三郎に頼みがあつて、わざわざわれら五名が伊東から参つたのじゃ、思い違いをするでないぞ、庄屋、乱氣しておるのはお前達のことだ」

「何んといわれますか。お役人さま、手前はこの川奈の村の庄屋庄兵衛にござります。弥三郎こそは、過日おふれのありました鎌倉の罪人、日蓮坊なるものを、先月以來三十日程浜辺の岩屋にかくまい申しました罪人でございますぞ。あれ、その通り庄屋の言葉にも従わず、暴れ狂つております。早く早くお召し捕りの程を願います」

「だまれ、だまれ。庄屋こそ静かにいたせ。これ弥三郎、静かにきけよ。実はなあ、伊東の地頭伊東八郎左衛門尉朝高様は、われらが主人であるが、不思議なことに先月五月十二日の夜よりご病氣になつてひどい高熱じゃ。いくら医者にかけても少しも験がみえない。もはや命があぶないところで、手のほどこしやうがなく、家来一同悲嘆にくれておつたのだ。しかるところ一昨日より陰陽師を頼んで占つてもらうと、この川奈の岩窟に一人の高僧がひそかにおられるとのこと。その高僧に御祈禱を願えば、病氣はたちまちにして癒えるとのことであつた。よつて秘密に探つてみると、鎌倉より日蓮なる御僧侶が川奈にきておられて、弥三郎お前がひそかに御供養申しておること。さようか弥三郎……」

「さようございます」

「弥三郎でかしたぞ……。お前がわれらを案内して、日蓮さまに御祈禱をたのむように取り次ぎをたのむぞ」

ことの意外の急変に、弥三郎はしつかりと握っていた櫓を庭にすてた。折から藪の影をはなれて、中天にかかった十二日の月は、合筆をしている弥三郎の姿をくつきりと映し出した。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

この弥三郎の唱題に唱和する題目の声がめつた。それは戸口に立つた女房の声である。

「女房よろこべ、南無妙法蓮華経だぞ」

弥三郎は女房に声をかけると、二人して一段と大きな声で月にもとどけと唱えるのであつた。

「南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

.....

.....

.....

「弥三郎、お前の喜ぶ気持はわかるが、こつちも急の用だ。早く、下の岩屋に案内をしてくれい」
役人から声がかかった。

「おうそうだ。こうしちやおれない。庄屋の話では、念仏講の奴等がなにか、日蓮さまに悪さをたくらんだとかの話。女房、お前が役人さまを案内しろよ。俺は一足先に岩屋に駆けつけて、日蓮さまの邪魔をする奴等があつたら、ただではおかねえ」

捨てた櫓をもう一度握りしめると、

「お役人さま、弥三郎、一足先に参ります。南無妙法蓮華経」

うれしさをお題目にまぎらわせた弥三郎は、下の岩屋をめがけて、一目散に駆けだした。

